

## スロヴァキアと欧州通貨統合

西武文理大学 松澤祐介

1993年、人口約500万の小国スロヴァキアが連邦国家であるチェコスロヴァキアから独立した。ソ連を中心とした旧COMECON諸国向け重工業に特化した同国の後進地域でもあり、同国の将来性は極めて悲観的であり、実際、ポピュリスト的な政権の下、市場経済への移行も進まず、スロヴァキアの評価は概して低かった。

しかし、1996年頃から銀行危機を、また1998年には通貨危機を招き、従前の経済政策運営の失敗が明らかになり、折からの政権交替で、新政権が抜本的な財政改革、市場経済化政策を推進した。

これは同時期に始まった、EU拡大プロセスに合わせたものでもあった。スロヴァキアは「機能する市場経済」を求める経済的基準のみならず、国内少数民族の扱いなどで政治的基準についても満たせず、加盟の第1候補からは外れていた。

これが市場経済化、財政改革への「バネ」ともなった。金融政策についてもスロヴァキア国立銀行はEU加盟後を意識した金融政策運営スタンスをとり、金融危機後の通貨への信認崩壊を食い止め、裁量的な金融政策を経てインフレターゲットを導入、インフレの抑制に成功した。財政改革とも相俟って、マクロ指標はマーストリヒト基準を満たし、旧社会主義圏ではスロヴェニアに次いで2005年にERMⅡに参加、2008年には、2009年初からのユーロ導入が決定した。

また、中央銀行と政府が協調して、1998年から銀行危機に抜本的に対処し、国内大手銀行を外資に売却するなどの改革を行った。

隣国チェコとの対比でも、一連の改革を大きな政治的、経済的混乱なく収束させた「市場経済移行」から「通貨統合」への過程のスロヴァキア国立銀行は、独立後の政策運営ノウハウが乏しい中で銀行監督の面では当初必ずしも成果を上げられなかったが、1998年の通貨危機以降、裁量的な政策運営からインフレターゲット導入を経て、政府とも協調した金融政策運営が独立後15年余りでユーロ導入にまで歩みを進めたことは高く評価されよう。